

メキシコ日食観測 IN カボ・サン・ルーカス

岡田 秀一

今回の日食は、何処にどのツアーで行こうかと悩んでいたが、結局天文ガイド協賛の JTB・メキシコツアーにスタッフとして参加しました。ツアーに参加したのは、74名とスタッフ5名、添乗員2名の計81名です。参加者の中には日食観測何十年という元国立天文台の田鍋浩義先生ご夫妻もおられました。最年少者が17才の高校生で、この辺がファミリーの多かったハワイとの違いだろうか。

8日午後成田を発ってL. A. へ飛び、L. A. で1泊した後、1日自由行動の後、夜チャーター機にてサン・ホセ・デル・カボへ。空港よりバスにて移動し、ホテルに到着したのが日食前日の午前2時でした。カボ・サン・ルーカスはアメリカのリゾート地ということで、ホテルの回りは観光客相手のみやげ屋が並んでいますが、周辺の遊ぶための施設は、私たちの泊まった海に面したレンガ色のものすごく大きいホテルが造ったようです。日本の西武のような開発のやり方です。

観測地は、カボ・サン・ルーカスで宿泊しているプラザ・ラス・グロリアス・ホテルの2階にある広いテラスを天文ガイド隊専用の観測場所として抑えてありましたので、ここを観測地として使用するホテル居残り組とメキシコまで来たのだから、もっと中心線に近い所まで行って少しでも長い時間皆既を見たいという遠征隊とに分かれました。ホテルでは5分37秒の皆既継続時間ですが、冷房の効いた部屋からすぐにテラスに出られ、周囲の壁には電源コンセントまで有り環境としては最高の所です。遠征隊はホテルからバスで北北東へ2時間半の所のリベラ(LA RIBERA)までの遠征隊を組みました。

当初十数人だった遠征希望者も最終的には23名になり、私は遠征隊に同行することになりました。遠征隊は日食渋滞の可能性があるため朝6時にホテルを出発したが、予想された渋滞は無く滞り無く観測地に到着した。観測地は海辺から100mほど入った広場で近くにはキャンプ場があり、日陰用のテント、トイレと飲み物は現地のエージェントに依って用意されていたので、暑さにやられることはなかった。湿度が低いので、日本のような暑さでないのが楽だった。キャンプ場には数人のアメリカ人が小さな望遠鏡を持ってきていた。

私の持って行った機材は、望遠鏡はFC-125SEで、マミヤM645での直焦点撮影と合成焦点距離4000mmに拡大してのプロミネンスと内部コロナのクローズアップ写真の撮影を予定していました。早速、望遠鏡を組み上げてプロミネンスアイピースで覗いてみると東西に大きいプロミネンスが出現しているので、皆に見せて上げ、皆既になるの

を楽しみに待った。暫くして見てみると西側の明るいプロミネンスが消えているので、おかしいと思っていたら、なんの事はない既に月に隠されていた（オソマツ！）。第一接触後太陽は徐々に欠けて行き、日向がだいぶ涼しくなった頃金星が見え出した。そうこうしている内に第二接触直前、ダイヤモンドリングが見えだすと歓声とシャッターの音の嵐となる。第二接触後直焦点で一通り撮影を終えて肉眼でコロナを見ると内部コロナが非常に明るい。長く延びた流線が東西に3本伸びている。パッと見ただけで太陽直径の5倍ほど確認できる。地平線の方に目をやると、一応夕焼けの様にはいるが、あまり赤くなくオレンジ色で美しくない。空はかなり明るく感じられたが、そのせいだろうか。

カメラを直焦点撮影から拡大撮影用に付け替える。この位の焦点距離になると、カメラのファインダーを覗いてストリーマーがはっきり分かる。太陽のリムに沿って撮影をして行くと北極の方に細い流線構造がハッキリと確認できたが、そのほかは東西のプロミネンス以外あまり特徴ある構造は見えなかった。一回り撮影したところでダイヤモンドリングとなり、地面を見てみると2秒ほどシャドウバンドが確認できた。太陽がどんどん大きくなり、回りからはため息とともに拍手と歓声が何処からともなく起きた。

第三接触後薄雲がかかったが、すぐに消えてしまい天候は問題なく観測を終えることができた。第四接触まで観測を続ける人もいたがほとんどがビデオで他のメンバーは観測を終えていた。観測地からの帰りも予想された渋滞は無く、バスは順調に走り、ホテルに戻ると居残り組も天候に恵まれ皆既日食を満喫できたとの事です。

翌一日カボ・サン・ルーカスでリゾート気分になり帰国の途に着きました。